広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	鏡の間 ： 生家のイマージュ ： その「夢の統合体」をたずねて
Author(s)	秦, 恭子
Citation	児童の言語生態研究 , 17 : 133 - 137
Issue Date	2009-07-10
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045215
Right	
Relation	

鏡の間

生家のイマージュ
―その「夢の統合体」をたずねて―

秦　恭子

ながい間、生家をうしなっていました。あの懐かしい家はそのうちにとり壊されると聞かされていたし、そののち移り住んだあたらしい家に馴染んでゆくために、生家のことは忘れてゆかなければならなかったのでした。引っ越しや建て替えのためのとり壊し、そうした止むにやまれぬ事情のもとで、おおくの人がいつか生家を離れてゆきます。わたしもまた幼いころ、親しんだ生家との別れを経験しました。現実の水位でうしない、またもっと内奥の、心のあり様とでもいうべき水位でうしないました。そしてきっとその喪失は、生涯をつらぬいてかなしく横たわるだろうと思っていました。

しかし数年前、あるきっかけからわたしはふたたび生家の門前に立つことになります。生家の錆びた鉄門の錠をはずし、ふかい絆で結ばれたあの懐かしい空間に、「ただいま。」と声をあげてかえれることになったのです。

わたしにその機をあたえてくれたのは、子どもたちのことばでした。児童の言語生態研究会が採録をつづけてきた子どもたちのことばが、わたしを生家へとつれもどしてくれたのです。なかでも「おふくろの世界―「おうち」「におい」作文にみる時間と空間―」＊1に採られている子どもたちのことばは、人がその幼少期にいかに家に住むのか、また家の母性をどれほど深く生きるのかをわたしに示してくれました。

わたしは最初のうち彼らのすばらしい語りのひとつひとつにじっと耳を傾けていました。しかしこれがE・ミンコフスキーのいう「反響」＊2なのでしょう、彼らの声はしだいにわたしの声となり、わたしの記憶として鳴りはじめたのです。そうして気がついたときには、わたしはあの懐かしい生家のしきいをまたいでいたのでした。

子どもの語りとは力のあるものです。失われたと思っていた生家の火は、わたしのうちに今はっきりと点り、またたくまにひろがってゆきました。そうなるともう、いてもたってもいられないものです。わたしはすぐさま、記憶の底から湧出をはじめた幼少時代の無数の断片を書き留める作業にとりかかったのでした。

耳の記憶、鼻の記憶、皮膚の記憶、内臓の記憶、筋肉の記憶、手のひらの記憶、指先の記憶、それら知覚をこえた記憶。瞬間のひかりの欠片のようなものがつぎつぎと群れをなして湧きあがり、それはたいへんにうつくしい光景でした。樟からこぼれる光のさざ波、まぶしくきらめく稚魚の群、星ふる夜の天の瞬き、雨露を湛えて光る杉林――。

（生家のイマージュはもちろん、「いかなる記述にも反撥する」＊3 円かなものです。そのため書くこと描くことのすべては焚きつけにすぎません。じっさい、あまりにつぶさの再現にこだわると、それは「静謐な大きな思い出をそこなう饒舌な注釈のごときもの」＊4 になってしまい、たちまち生家は消失してしまいました。）

粉々に割られた鏡の破片がふたたび統一され、かつての像を映しはじめる。それはほんとうにたのしく悦びに満ちた時間でした。そうしてそれを終えたつぎには、だれかと語り合いたいと思いました。現実には幼少時代をともにしなかったたくさんの子どもたち――いままさに子どもを生きる人びと、かつて子どもを生きた人びと――といっしょに、生家をたずねてみたいと思ったのでした。

そのためにわたしは一まいの紙を用意しました。わたしをいざなってくれた子どもたちのことばのいくつかと、わたしによみがえった幼少の記憶のいくつかをちいさな紙に張りつけて、即席ながら原初の家をあらわしてみようとこころみたのです。

（p．135―136参照）

子どもという言語的盲目の時代には、わたしたちは今よりずっと直にこの世界にふれ、ふかく住んでいました。G・バシュラールのことばが見事に生家をとらえています。

生家は住まいの統合体以上のもの、夢の統合体である。生家の片隅の一つ一つが夢想の棲家であった。＊5

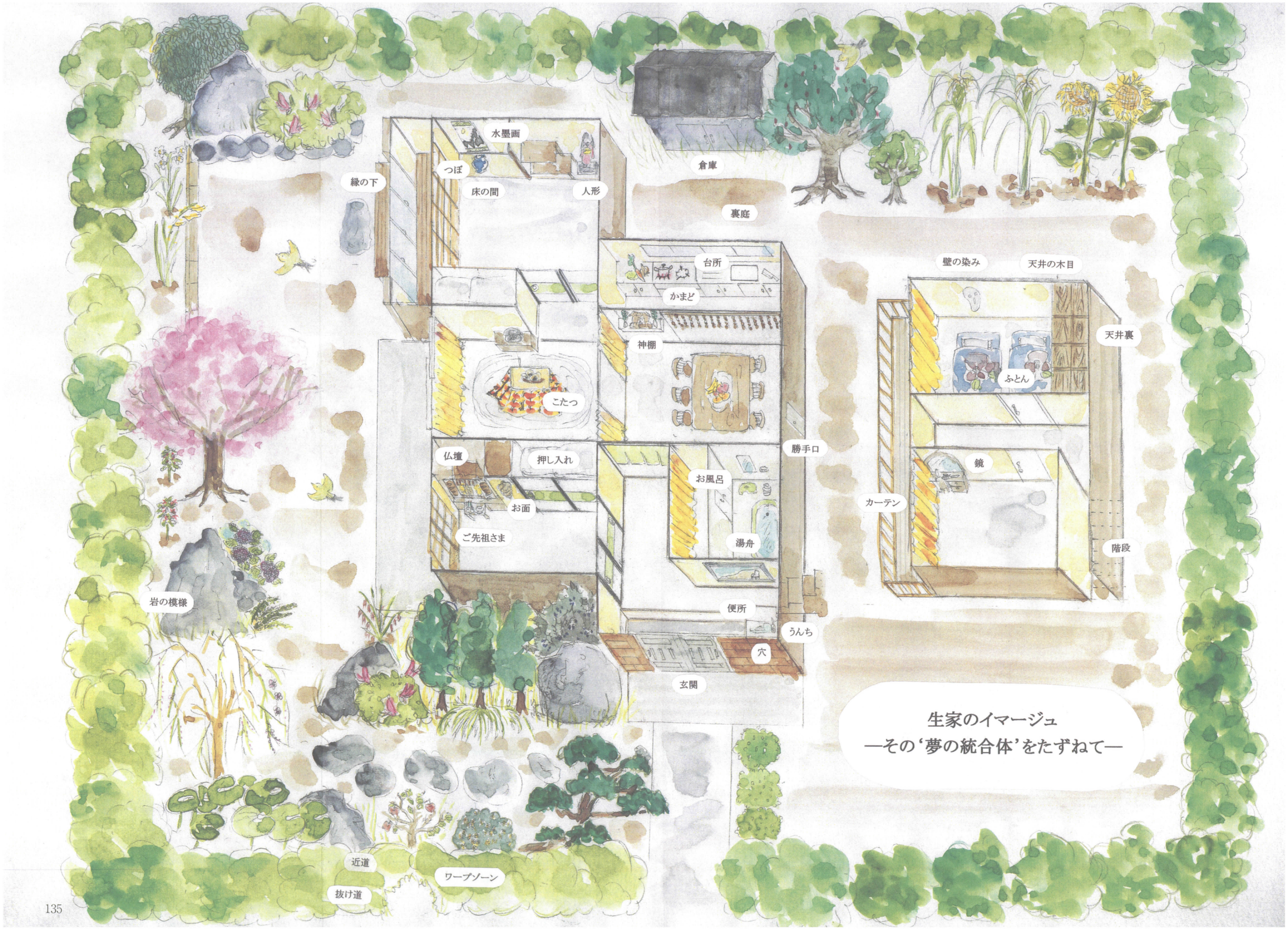
夢の統合体。わたしたちはかつて家の母性、その原初の熱にしっかりとつながれ、あらゆる片隅で夢をみていたのです。家はやわらかい蒸気の衣服としてわたしたちの皮膚にしっとりと触れ、一方で無限のひろがりをもってわたしたちを冒険へとつれだしました。

ジョルジュ・スピリダキはいう。「ぼくの家は半透明だ。だがガラス製ではない。それはむしろ蒸気ににている。壁は、ぼくの希望に応じて、収縮し、弛緩する。ぼくはときどきその壁を、ぼくを四囲から隔離する鎧のように、ぼくのまわりにしめつける。……しかし、ときにはぼくは、ぼくの家の壁そのものの空間をおもいきりひろげさせてやる。その空間には、無限の伸長性があるのだ。」

スピリダキの家は呼吸する。それは鎧であり、そして無限にひろがる。またわれわれはそのなかにあっては安全と冒険とが交替するなかにすんでいるといえよう。それは細胞であり、またそれは世界である。幾何学は超越される。＊6

言うまでもないことですが、この家は思い出や記憶の底を突き抜けた深部にその礎を置いています。記憶の限界をはるかにこえたむこうから、生家のイマージュは立ち昇ってくるのです。つまり、わたしたちの幼少時代がもし多くの例にもれず社会的孤独や不安に苛まれたものであったとしても、この家はそのような歴史の外側にたえず現在しているということです。予断はつつしまなければなりませんが、わたしたちのうちによみがえる生家のイマージュは、いかなる歴史からも自由な幼少時代の心性、こころのあり様がうみだすものといってよいのかもしれません。それは記憶と想像力の融合する一点から湧きあがってくる、無尽蔵のちからです。

子どもたちのことばは呼び水となり、とう



生家のイマージュ
—その‘夢の統合体’をたずねて—

だれかのおうちはうんこだった。とってもくさいうんこのおうちだった。においはとってもくさくて、そわったら本物のうんこだったのです。わたしは水槽をさがしました。水槽をあけるとうんこがでました。全部がうんこでした。植木もうんこでした。うんこの指輪、うんこの洋服でした。（4年女子）

階段がすきだった。ピンポン玉を打ちつけて、そのチ測不能なはね返りと段をみつけて本をひろげ心地のいい顔になると階段はまったくちがうがうつくしいように見えた。（筆者）

昼間、見たい所がある。それは天じょうの上である。そこに、かくし小ばんとか、お金がありそうな気がする。本当にみてみたい。すごいものがかくされていそうで、とれたらよだれが出てしまうかもしれない。（3年男子）

寝室の天井は木目のおばけだった。「様のおばけ、象のおばけ、鳥のおばけ、大きな蜘のカエル、石つけ所の間仲間認し、新たに発見しみんなのおばけ」を在眼のくるとと、寝室とみんなのおばけ。面系かに眼くわえたに発見しみんなのおばけ。つの間仲間認し、新たに発見しみんなのおばけ。面系かに眼くわえたりしながら、いつてくるようだった。（筆者）

寝室の壁の染みがおじいさんの顔に見えて怖かった。動おじいさんの顔ってこわくて怖しかったがないのだが、たり持おやすみのの採移をしたり、悲しい気りもしたときに話相手になってもらってい た。（筆者）

ーつだけわたしとってこわいところがある。それは、かがみ。お母のみさんがおけしようするところのかがてやれにかがみがあるからこわくない。（3年女子）

るすばんをしたら、かがみがおとってました。つぎに、じしんがあって、かがみがもっとおどっていました。（後略）（2年女子）

カーテンにくるくるまきになってじーっとしていた。（筆者）

いとこのかねむれない家に行ったときになかなかよくねむれない。あとんのにおいがちかんじがする。（3年男子）

自分のふとんってて

うんちが大好きの男の子。トイレにうんちをしようと10分～15分は出てこないで。大きな声を出して自分はでいるのである。（5才男子）

寝室には区色の食重があって、錆びついた扉はこどもの力ではなかなかつ ひらかなかった。こわいものは容易にたくさんの人形がこっちらを見ていた。数くのほうには階段がみえて、闇くと消えていった。（筆者）

（前略）トイレに行く時はそうりそろりと足音をたてずに行く。流す時はジャーと音がするとこわいので流れた時はちょうスピードでくやにもどる。（3年女子）

鼻がぎりぎり出るくらいまで湯布団に浸かって、風呂蓋を閉める。ほのまぶたをとじたかんて落ちつく。そのまま目をとじている。（筆者）

N君の家のガスコンロには火の神様がいた。神様に触れるものだから神さまをテ様の上にに置いたりしてはいけ接ら さいと言われていたそうだ。（筆者）

玄関に紙が泉のように湧いてくる夢をよくみていた。（筆者）

あたらしい神棚がやってきた日のこと。「神さまのお家だよ。これから祀くからね。」と父が言い、わたしは小鳥を巣箱によぶみたいにうれしかった。その日の夜に、白い光が入ってくる夢をみた。（筆者）

帰ってきてドアを開けたしゅんかん、なつかしいなーと思う。そして、自分のくやに行くとやっぱりの自分のくやだなーと思う。（3年女子）

いとこの家の寝室には埋輪みたいな顔のお面が掛かっていた。お沼まりの夜に、その暗いくぼみの眼にぽっつと光が灯るのをみた気がする。生きていると思っていた。（筆者）

いったいどこにワープゾーンがあったっけ。フェンスの穴や目や建物の裏細い坂道や植木の隙間。いま考えるとちっとも近道ではないのだけれど、通ると世界が切り替わって、確かにワープしていたと思う。（筆者）

いよいよちゃんという人形があって、よるでんきをけしてねるときなんかちょっとこわい、ねるときにわたしのかおをみてたらどうしようっ。たそれをみるとこわいのでいつもはんたいがわにねているよ。（3年女子）

るすばんの時はこわいから、テレビをけして、こたつもけして、真っ暗なこたつに頭までもぐって、じーっと音を聞いている。すきまから、そとをちょぼっと見ている。（3年女子）

せんせーさまは、自分の体がないからしゃしんにとりつって、かぞくをまもっている。角度を変えてみてもこせんせーさまは、こっちを見ている。てしまうな。こわい顔だとにげるしかない。（3年男子）

安心する場所はムクムクとあったか一いこたつの中ですー。こたつの中に、頭までて入れあたたかい気分になっていろんなことをそうぞうしている。（4年女子）

押入は隠れ家だった。懐中電灯のずかに円い明かりに本を読んだり、ふかふかいぶん深くくるまってぬくぬくしていた。（筆者）

「幽霊岩」があちこちにあった。岩の模様やコンクリートの染みが人んおだ。見えたり見えたりの髪の長い女の横顔が人なとうしく、その前でいつもうおとうの顔を背けて走った。雨の日はそれを通るときはみた。（筆者）

縁の下は深淵な暗闇の世界。しゃがみこんで目を凝らすと、闇は得たいの知れない蠢くものでぱんぱんにあって見えた。（筆者）

一人でいる時、ぼくは家をたんけんしている。たまにとうみんこっこをする。（3年男子）

突つ立つの間の山水画のまえにぽーっと山霧がおおわれいることがよくあった。糸山霧々におおわれた世界。虚空にうかがぶうみたいなを庵もすべて、霧から生まれてくりたしも霧にみえた。気がついたらわくとと雑のなかをつつまれていて、ゆっくっていた。（筆者）

遊びから帰って来てドアを開けたとたんげんかんの前に大きな穴が空いてのぞくと「うわーたすけてー！」そしてどうくつにつきました。その中を見ると茶ッチャーン、そこ海の中でそこにもあながありました。入ってみるとそこしょのどうくつがありました。そして気がつくと家。おかしいなー。さっきまでどうくつにいたのに…。（3年女子）

おうちの中はめいろだらけ。トイレやおふろや台所や、いろいろな所につながっている。めいろをたどっている人が、今、宇宙にいった。（4年男子）

に枯れてしまったはずのわたしたちの井戸にふたたび水をもたらします。鼓動する幼少性の井戸――。それは「幼少時代の核が休みなく活動している」＊7 ことをはっきりとわたしたちに告げ知らせ、生家はわたしたちのうちに不滅であると教えてくれるのです。

さいごにG・バシュラールのことばを置いて、このちいさなお話の幕をとじたいと思います。

人間のたましいのなかにある幼少時代の核の永遠性を認識する、ということにつきるであろう。幼少時代とは、不動でしかもつねに生きいきしており、歴史の外側にあり、他人の目から隠れていて、それが物語られるときには歴史を装っているが、しかし輝きだす瞬間、つまり詩的実存の瞬間といっても同じことだが、その瞬間にしか現実の存在とならないものである。（―略―）それは現実の人生のなかでは効力のないひとつの過去をあたえるにすぎないが、その過去は突然この生のなかで躍動化され、想像され、あるいは再想像され、効果的な夢想となる。＊8

――どうかだれの内にも生家のイマージュ、その不動の故郷がよみがえり、生涯をたのもしくささえてゆきますように。

＊1 『児童の言語生態研究No.15』収録。
＊2 E・ミンコフスキー著／中村雄二郎訳『精神のコスモロジーへ』参照。
＊3 G・バシュラール著／岩村行雄訳『空間の詩学』p.58
＊4 G・バシュラール著／及川馥訳『夢想の詩学』p.148
＊5 ＊3に同じ。p.62
＊6 ＊3に同じ。p.112
＊7 ＊4に同じ。p.130
＊8 ＊4に同じ。p.121―142

（福岡・北九州市立浅川中学校講師）